

---

# 猫神社

\_瑠姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫神社

### 【Nコード】

N4088BA

### 【作者名】

— 瑠姫

### 【あらすじ】

主人公・葉月が住んでいるところにはある噂がある。

噂、というかマジで出る話。それを確かめるため行動を起こすが…

…

## 第一話 猫道！？

「にゃ〜…にゃ」

あくびをするような猫の鳴き声にビビり後ろを振り返るとやっぱり猫がいた。

猫もこちらに気づいたようで慌てて去ってゆく。

私の名前は大原葉月。おおはらはつき

小学6年生の極々普通の女子である。

私がいまいる場所は家からちょっと離れたところにある道。

お母さんからのおつかいの帰りだ。

ネギがささったもう行き慣れたスーパーのレジ袋を右手に持ちもう通り慣れたはずのこの道を歩く。

通りなれているはずなのに足はカクカクと細かく震えている。

寒さのせいだ、と無理矢理考え込み前を見た。

この道は私の通ってる小学校でも、近所でも有名。

ここらへんの人なら知らない人はいないだろう。

「猫道」と呼ばれている道。

名前は極々普通でよそからきた人でわかるくらい単純。

「猫がいつぱいいる道」で猫道。

単純すぎて笑える。

しかしこのへんの爺や婆は笑わなかった。

それどころか大人はみんなこの道を避けた。

猫がいるだけなのに、どうして？

皆、そう思うことだろう。

それは、この道は出るから。

これは本<sup>マジ</sup>気だ。

それも品のない怪談話や自殺した女が出るとかじゃない。

猫が出るのだ。

……わかるだろうか？

説明するのが難しいのだが、しつぱが二つある猫が出るらしい。

見たことは……

あれは2年前。

見てしまったのだ。

この道を歩いていたとき。

そのときはまだその尻尾しっぽが二つの猫の話を信じてはいなかった。

しかし、いつものようにおつかいの帰り道に

普通の猫より低い声の鳴き声がしたと思い振向いたら

いた。

ずっしりと重そうな体つきにオヤジのようなポーズ。

そしてなにより人間臭いあの低い声。

もう一目散に帰って近所の人とか家族に話した。

みんな驚いたりお経的なものを唱えたり…

ウチの婆様に限ってはぶっ倒れた。

そんなヤバイものなのかと近所の子供たちは皆震え上がって…

もうこの道を通る者は少ない。

まあ、私はこの道を通ってるのだが。

恐怖は感じるもののココを通らなければ帰れない。

そんなとき、ある奴に声をかけられた。

## 第二話 キムチ鍋

「オイ、なにやってんの?」

心臓が凍りついた。

うん。もう凍りつきそうとかのレベルじゃない。

ゆっくりと振り返る。

引きつる私の笑顔。

「あは…相沢…」

相沢とは私の家のとなりに住んでいる者。

私より20年上だ。

なぜか苗字で呼び合っている…。

「いまどきココの道通ってるのってお前くらいだぞ…」

そうボソッと呟きレジ袋の中身を覗く。

「ん…ネギに豆腐…えのき…」

ブツブツと中身を言ってゆく相沢。眉間にはシワが…険しい顔。

「キタツ！！キムチのもと！！」

「は？」

確かにキムチのもととは入ってるけど…なにか？

いきなり叫んでガツポーズしている相沢に戸惑いを隠せない私。

「お前んち今日の夕飯キムチ鍋か！！！食いに行くからおばさんに言つといて！！」

「は！！！！？」

さっきより大きな声で問う。

しかし自由奔放な彼が聞くはずも答えるはずもなく…

キムチ鍋がすきな？変わってるな…

なんて考えながら前を見たらもう相沢はいなかった。

かなり前を全速力でスキップ調に走っている。



そうそう、猫道は真っ直ぐな一本道で100メートル先ぐらいは見える。

「ミャーオ…」

可愛くて小さい猫が足元に擦り寄ってきたのでそつと引き剥がし親と思われる茂みの中にいる猫の近くに置いた。

### 第三話 噂

『いっただっきまああす！！！！！』

私のお父さん、お母さん。

そして相沢。

まあ相沢は明るいうちに食べに来るって報告してきたからよいけど。

相沢のお母さん、そしてお父さんも一緒だった。

笑顔で一番先に鍋へ箸を伸ばしたのは相沢のお母さん。

「おいしいわあ さすが奥さん！！」

「あらあゝ鍋は得意なのよ！！」

さっきまで何でコイツラもいるんだよ的な顔をしてたお母さんも

相沢のお母さんの言葉で上機嫌。

つつか人んちのご飯たべる相沢も

それについてきた父親も

笑顔で一番先に食べ始める母親も

ソイツの煽てですぐ上機嫌になるお母さんも

それになにもいわないお父さんも

おかしい〜〜〜!!!

「ごちそうさま…」

何かに負けた気がして食が進まず一番先に茶碗を下げた。

「あらあ、もう終わり？葉月ちゃん？もつと食べないとあゝ」

お母さんとしやべっていた相沢のお母さんがいう。

お前んちじゃねーよ！！と心の中でツッコミを入れ自分の部屋に戻った。

そしてすぐベッドに飛び込み身を沈めた。

遠くに聞こえてくるあの人たちの笑い声。

妙に疲れるんだよね…相沢のお母さんといると…

コンコン

「ふえ〜い」

突然なつたノックに驚きながらも返事をする。

「葉月？どうしたの？」

クッションをかかえ起き上がる私。

入ってきたのは相沢だった。

「別に…ご飯は？」

「食べ終わった。葉月、怒ってんの？」

「別に！！」

強がってみたりする。

「というか怒ってる？と聞かれはい、怒ってますという人がどこに  
いるの？」

「あゝもうしょうがないなあ、相沢お兄様が面白い話してやるうー!」

ぶすつと軽く相沢を睨んだが彼はもう話す気満々だった。

「猫道があるだろ!!?」

「……うん…」

話せとも言っていないのにしょうがないなあ、とかいう態度で話し始める相沢。

ム力つくなあ…

「まーっすぐだけど突き当たりがあるだろ!!?」

あるだろ!!?が多くない?コイツ…

「その突き当たり小さい神社的なトコがあんだろ!!?」

乱暴になつてきてるぞ…

というかその神社って神社とはいえないくらい小さい祠じゃん。

しかし相沢は怪訝そうな顔をする私を置いて一人で夢の世界へと旅立っていった。

ようにキラキラと瞳を輝かせている。

そして息をすうっと吸った。

こりゃ大声で最後のシメを言う気だな…

耳をふさぐ。

「その神社にお供え物をして願い事すると願いが叶うんだってー  
ーッッ！！」

予想以上の大声を出す相沢。

瞬間「うるさい！！！」と相沢のお母さんから怒り声が聞こえた。  
キャピキャピとクラスの女子のように生き生きと喋る相沢。

「くだんな……」

「マジだって！！！！俺、叶ったんだってば！」

「！！！？」

クッションを放り投げる。

「マジで！！！？なに願ったの！！？」

「えへへ…絶対嘘だと思ってて…ケーキが食べたいって願ったんだ。そしたら…」

「…その日のおやつがケーキだったワケね。はいはい」

舌を出して喋る相沢はちょっとだけ子供に見えた。

でも…神社…気になる…

相沢のは偶然だろうけど。

もしかしたら…叶うのかも…？

女子はやっぱりこついう噂が気になるように出来てるんだよ。

私はばつちり脳みそ内にそれを記録して相沢を追い出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4088ba/>

---

猫神社

2012年1月10日21時47分発行